

前言——凡例にかえて

*

「説話集の構想と意匠」というテーマのもとに書かれた本書は、対象とする範囲を示して、「今昔物語集の成立と前後」と副題を付す。「今昔物語集」とは、平安時代末期に成立した浩瀚な説話集の固有名であるとともに、今昔／物語／集と分節される形態を有した文学史上の一態——「今昔」（＝「今は昔」という冒頭言を、原則としてすべての伝承物語（＝説話）に付して集め、固有の物語集を形成しようとする作品群——の謂いを、重ね表している。

いずれの意味においても起源的位にあるのが、散佚「宇治大納言物語」である。そこで本書は、第一章を「今は昔」の説話集」と設定して、「宇治大納言物語」の成立前後とその周辺世界を論じ、続く第二章と第三章で、その名を負う『今昔物語集』説話集生成のダイナミズムを考察する。第二章では始原から天竺・震旦世界の形成と展開を中心に、第三章ではこの作品の立脚点としての本朝部を射程として、それぞれ構想と意匠という視点から論じている。

第四章は、希有な序文を誌して「宇治大納言物語」の成立を描き、その連続と不連続の中に自らを位置付ける『宇治拾遺物語』の、意匠と世界を分析する。可視的な枠組みを持たず、独自の

手法で読者を誘うこの作品については、「連想」という、研究史上もつとも重要な操作概念を再測定するところから、論究を進めていく。最後に、本書総体を俯瞰すべく、新たな視点で書きおろした終章を付している。

* *

本書の構成に当たり、第一～四章の冒頭には、それぞれ内容の導きとなるような、小文を付した。また第一章から第三章までと終章には、論述の道標をもかねて、各論の段落の漢数字に小見出しを付し、各節の内容を表象している。ただし、第四章だけは、対象作品の性格にも鑑みて、すべて小見出しを廃し、漢数字のみの区切りとした。

* * *

巻末には、論述に際して繰り返し用いられた文献について、引用本文等の一覧を付した。そして、本書各章を構成する論文の初出を示す情報などをも含んだ、あとがきを誌している。最後に、末尾には、簡単な索引を作成した。本文参照の便宜とされたい。

目次

前言——凡例にかえて……………(1)

第一章 〈今は昔〉の説話集

第一節 〈今は昔〉の文学史——起源と再生……………3

第二節 〈今は昔〉の意味論——宇治大納言物語の周辺……………25

第三節 源隆国における安養集と宇治大納言物語の位相……………54

——南泉房と延久三年をめぐる——

第四節 宇治大納言物語享受史上の分岐……………100

——顕昭所引の佚文をめぐる——

第二章 今昔物語集の構想と意匠

第一節 阿難結集説話と〈如是我聞〉の構造……………133

——今昔物語集の形式をめぐる——(上)

第二節	説話集と物語と——今昔物語集の形式をめぐって——（下）……………	161
第三節	廃墟の表徴——今昔物語集の意匠をめぐって……………	185
第四節	〈表題〉から見えるもの——鈴鹿本今昔物語集から……………	218
第五節	三宝感應要略録の出現と震旦仏法史の劃期……………	243

第三章 今昔物語集本朝部の構想と世界

第一節	三宝絵から今昔物語集へ——三国仏法史観と説話文学史の視界……………	295
第二節	仏法初伝と太子伝——本朝仏法部の始発をめぐって……………	331
第三節	聖徳太子伝から国史へ——今昔物語集本朝部という構想……………	362
第四節	今昔物語集本朝部の構想 ——卷二十五「兵」譚の成立と「今」をめぐって——……………	399

目次

第四章 宇治拾遺物語の意匠と世界

第一節 異国へ渡る人びと——宇治拾遺物語論序説……………471

第二節 宇治拾遺物語の時間……………511

第三節 ひらかれる〈とき〉の物語——宇治拾遺物語の中へ……………564

第四節 地藏から観音へ——宇治拾遺物語の中世……………580

第五節 〈次第不同〉の物語——宇治拾遺物語の世界……………623

付節 〈なるべし〉という表現のこと……………673
——〈自記〉と〈他記〉とのあわい——

終章 宇治大納言物語の方法と文学史……………691

あとがき……………711

引用本文等一覧……………719

書名索引……………左1

人名索引……………左13

第一章
〈今は昔〉の説話集

sample

「今は昔」と始められる物語のかたちがあった。作者と語り手と、そして伝承世界との間を劃する、和文的な起語として創始されたらしいこの語は、物語文学史上の嚆矢『竹取物語』への付与によって、象徴的に登場する。ただし、自明の前提として実在するかにみえたそれも、いづれ一つの流行であった。『源氏物語』の出現がもたらした作り物語の飛躍と成熟の中で、「今は昔」という起語は古びて意義を失い、自然に捨てられていく。ところがその底流で、この形式はひそかに、あらたな文学史上の一態として復活しようとしていた。「今昔」（「今は昔」という冒頭言を、原則としてすべての伝承物語（＝説話）に付して集め、固有の物語集を形成する作品群の方法としてである。

その起源的位置に、宇治大納言源隆国撰述と伝えられる、散佚「宇治大納言物語」がある。本章は、「宇治大納言物語」をめぐって、第一節と第二節で、成立前史としての物語史をたどり、復層的に、「今は昔」の発生と「宇治大納言」における再生の歴史、そして意味論に及ぶ。第三節では、「宇治大納言物語」生成の時代と状況を追い、『安養集』成立と成尋の入宋、また第三期勸学会が、それぞれ相関的に進化した延久三年という時と、宇治平等院の南泉房という場に着目する。そのうえで、源隆国の文学と学問、そして仏事のゆくえをうかがい、「宇治大納言物語」の位置付けを考察する。第四節では、散佚した同書の輪郭を索めて、享受史の一面を、院政期歌学書に追っている。

第二章 今昔物語集の構想と意匠

sample

承保四年（一〇七七）七月、源隆国没。それからどのくらいの時が経ち、またどのような経緯があったのだろうか。少なくとも今日残されたかたちでは、十二世紀をまたいでから、「宇治大納言物語」の直接的な後継者として、文字通り「今昔物語集」の名を負う、巨大な体系的説話集が出現する。

本章では、『今昔物語集』という作品の始発から、天竺・震旦世界の形成と本朝部との関わりまでを射程として、その構想と意匠を論述する。第一節では、「今ハ昔」という起言を承け、ケリで統叙し、「トナム語り伝ヘタルトヤ」と閉じる形式を徹底する『今昔物語集』の方法について、巻四巻頭話の分析から、経文の「如是我聞」との類比を追求し、「今昔」という起語に込められた新たな意味と、作品存立との関わりを考察する。

作品の根幹として、釈迦の降誕からその生涯を描く巻一〜巻三は、文字通りの経文世界であるが、一連の外題に『今昔』は「天竺」とだけ標して、「付く」のテーマ設定を附さない。巻四に至って「天竺付仏後」、巻五に「天竺付仏前」と規定し、その三国仏法史の世界を立ち上げていくのである。そこで第二節では、巻三での区切りと、巻四の冒頭話の結集というアクセント（「如是我聞」伝説）が指し示す『今昔』総体の方法と構想を提示する。第三節は、天竺部の最終巻五冒頭話のデザインから「廢墟の表徴」を読み取り、震旦部、本朝部と対比される原始的イメージを追う。第四節では、現存する『今昔物語集』写本の根源的位置にある鈴鹿本（京都大学附属図書館蔵）について、表題のずれから、震旦部の構想と意匠形成を探り、第五節では、震旦部構成の基幹資料の一つ『三宝感應要略録』の文献学的研究から、『今昔』震旦仏法史の方法を分析する。

第三章 今昔物語集本朝部の構想と世界

sample

形式を方法に飛翔させ、三国の視界を獲得しようと希求した『今昔物語集』は、飄つてついに、自らの実在する、本朝世界の叙述に直面する。『今昔』は、仏法史的理想像としての三国史観からの投影と、現実としてあらがいがいようなく現前する日本の歴史と、それを叙述する多様な、しかし不完全な資料との間に、どう折り合いを付けようとしたのだろうか。

第一節では、本朝仏法部の根本資料である『三宝絵』の構造と三国仏法史観を分析し、説話文学史的視点から『今昔』の〈本朝部〉総体の始発を窺う。第二節では、『今昔』が受け止めた仏法初伝の意義と、日本仏法史叙述の根幹となる聖徳太子の形象との関わりを追いかけて、如上の問題を考えていく。

『今昔』本朝部の構想を決定的に拘束することになる聖徳太子伝の構造は、仏法と、国史を基軸とする世俗世界とを一体的に提示する意匠としてイメージされる。その枠組みは、太子の生涯に留まらず、その前生を一体的に描き出し、さらに彼の死後、大化の改新までの一連を、蘇我氏の因縁と絡み合った因果の相応として結構する。『今昔』の本朝部の二つの起点（巻十一、巻二十二）は、それをあたかも二つに切断して配置したかのような姿である。聖徳太子伝から国史へ、第三節では、そうした単純化と分断のゆがみが、三国仏法史というインドからの視界に彩られた『今昔』の、世界史的視界でありつつ、同時に致命的な桎梏でもあったのではないかと論じていく。

ただしそのひずみとは、裏返せば、『今昔』という作品が内在する、熱い展開への意思の結果にほかならない。ポイントは、全三十一巻を最終形態とする現行『今昔』において、巻二十五に感知される、しかるべき作品構成上の区切りである。第四節は、巻二十一の欠落と、二十二〜二十五までの幅轆する改編生成の痕跡をたどり、『今昔物語集』巻二十五までの区切りの意味と、そこから浮かび上がる『今昔』の「今」を考察する。

第四章 宇治拾遺物語の意匠と世界

sample

おもちゃ箱をひっくり返したような、とりとめのない混乱の中に、きらめく佳品の短編物語がちりばめられる。ただのカオスではない。どこかに統一の意思が働いているようだが、その脈絡は、いつかな自明ではない。でも読者は、自分だけではその真意がわかつていると、独り連想の得心を紡ぐ。読み手の数だけ交叉し、すれちがう恣意を、テクストの愉悅という抽象としてだけ、共有する作品…。

『今昔物語集』究極の末裔として、たとえばそんなイメージで評してみたくなる不思議な中世の作品が、『宇治拾遺物語』である。この本は、序文で「宇治大納言物語」の伝説的な成立を語り、その生成と不分明な享受相の中に、連続と不連続とを曖昧に語って、自らを位置付けようとする。冒頭に付記される「抄出之次第不同也」ということばが象徴するように、「宇治拾遺」は、『今昔物語集』とは対照的に、可視的な枠組みを持たず、あるいは示さず、「連想」という、独自の手法で読者を誘う。ただし、研究史上最大のこのキーワードは、その理解と運用とが、必ずしも明晰なかたちで成されてこず、時に論者を、解釈学的循環に、たやすくもしくは甘美に陥れて、気付けさせない…。

本章では、「連想」行為という概念の再考から、論述の措定を行う。

第一節では「異国へ渡る人びと」を素材に、第二節では「時間」をキーワードに、第三節では「ひらかれる（とき）」と夢を、第四節では「地蔵から観音へ」という説話分布に注目して、「連想」が切り開く、物語時空の往還を考察する。そして第五節では、冒頭に注記された〈次第不同〉という言葉に着目して分析を進め、この語に表象される本作品の物語世界を論じて、『宇治拾遺』論の結語的位置付けとする。

付節は、『宇治拾遺』の専論ではなく、中古から中世に至る散文の中で、〈なるべし〉という末尾表現をめぐる、「自記」と〈他記〉とのあわい」を追いかけた、文体史的考察である。『宇治拾遺』の特徴的な序文のスタンスを定位するために必要な分析として、布置してある。